様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３３７６

研究課題名（和文）日本新興人形劇の全貌とその波及に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study on the History and Influence of Modern Japanese Puppet Plays

研究代表者
菊地　浩平（KIKUCHI, KOHEI）

早稲田大学・文学学術院・その他（招聘研究員）

研究者番号：３０５８０４３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　今日では子ども向けと思われることの多い人形劇であるが、戦前・戦中においては政治的なメッセージを発信するためにしばしば活用されていた。本研究では、関係者への取材や資料調査によって、人形劇関係者が戦後、舞台だけなくテレビや映画といったメディアへの進出を果たし、作品内容にも様々な影響を及ぼしていることを明らかにした。
　得られた成果の一部は、単著『人形メディア学講義』（河出書房新社）としてまとめ、刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究成果の一部をまとめた『人形メディア学講義』の刊行をきっかけに、学会講演やシンポジウムへの登壇、展示や舞台公演への協力依頼が増えた。人形文化研究に携わる者は現時点で決して多くないが、人形やその文化に対する世間の関心は高く、本研究のようなアプローチの学術的・社会的意義を実感している。今後も本研究で試みたアプローチは継続し、人形文化研究の可能性をより広く発信していくことを目指す。

研究成果の概要（英文）：　Today, they are mainly considered to be puppet plays for children, but they were used earlier, particularly during WWⅡ, to send political messages. In this study, through interviews and research of materials, I have clarified that people involved in puppet plays have various influences as a result of their access not only the to stage, but also to media such as TV and movies after WWⅡ.
　A part of the obtained results were compiled and published as a book, “An Introduction to Studies of Ningyo-Media.”

研究分野：人形文化研究

キーワード：テレビ人形劇　人形劇団プーク　人形劇団ひとみ座　結城座　テレビ天助漫遊記　ダアク座

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

報告者は、これまで日本学術振興会特別研究員（PD）としての活動や科学研究費助成によって国内外機関に出向き、日本の演劇人にも大きな影響を与えたことで知られるゴードン・クレイグに関する未発表資料を収集し、分析を行ってきた。

こうした研究活動を通じて、クレイグが日本の演劇人たちだけでなく、大正から昭和初期にかけて隆盛をみた日本の新興人形劇にも強い影響を与えていたことが分かってきた。そもそも新興人形劇は、加藤暁子『日本の人形劇 1867-2007』（法政大学出版局、2007）によればアイルランドを拠点に活動していたダアク座が 1894 年に来日し、上方から糸で人形を操るマリオネット形式を伝えたことで始まったといわれる。日本の伝統的な人形劇には結城座の糸あやつりや人形浄瑠璃文楽などがあるが、操り手が観客から見えないマリオネット形式は当時の日本において画期的なものに映ったようだ。このダアク座の手法を取り入れつつ、新興人形劇が日本で本格的に花開いたのは大正時代である。なかでも 1923 年の遠山静雄宅における『アグラヴェーヌとセリセット』が立ち上げ公演となった人形座は、伊藤熹朔やその弟の千田是也らを擁した当時を代表する人形劇団であった。人形座は 1927 年に小山内薫の『人形』や、口の代わりに拡声器、耳の代わりに受話器がついた人物と自動人形が共演する『メツザレム』を発表するなど、先鋭的な作品を発表し精力的に活動を行った。伊藤や小山内はクレイグから強い影響を受けた演劇人として名高く、よってこの時期に発表された人形劇作品はいずれも注目に値する。またこの大正から昭和前半にかけては、人形座の活動に触発された人形劇団プークをはじめとする様々な新興人形劇団が立ち上がり、テレビや映画など舞台上演以外にも活動の場を広げるなど全盛期と呼ぶに相応しい時期であった。

それにもかかわらず、今日人形劇研究が決して盛んではないこともあってか、こうした作品群やその活動の実態が学術的観点から取り上げられることはあまりない。申請者は 2017 年の論文で、1954 年の映画『ゴジラ』に登場する着ぐるみの造形に中心的にかかわっていた利光貞三が人形劇団プーク出身であったことを明らかにしつつ、当時の人形劇文化が特撮映画にどのような波及を見せたかを検討した。しかしこの時期に発表された人形劇作品の数や他メディアへの影響力の大きさを考慮すれば、充分な検討がなされたとは言い難い。

こうした人形劇研究を巡る状況を踏まえ、日本の新興人形劇に関わる資料収集と関係者への聞き取り調査を行い、作品・資料分析に活用するという計画を着想した。これまでクレイグ研究に従事してきた報告者が、その影響を色濃く受けた日本の芸術家たちの人形劇作品やそれに関する言説について詳細に検討を行えば、一定の成果が見込めると考えた。

２．研究の目的

本研究では、大正から昭和初期にかけて日本で隆盛をみた新興人形劇の全体像とそのメディア進出の状況について明らかにすることを目的とした。

そこで、資料調査や関係者への聞き取りと資料分析を行い、まずは日本の新興人形劇にはどのような作品が存在し、いかなる言説があったのかを明らかにすることを目指した。その上で戦後、人形劇がテレビや映画等へ積極的に進出を行っていくにあたり、誰がどんな技術や理念をどのような経緯で持ち込み、その結果いかなる波及を見せていたのかを具体的に検討した。そして今日ほとんど顧みられることのない日本の新興人形劇が、大正から昭和初期にかけて有していた影響力の強さを明らかにし、当時の人形表象文化について今後研究を行なっていくための基盤を整備することを最終的な到達目標とした。

３．研究の方法

本研究では、3 年の間に以下の 3 つの作業を段階的に行った。

１）資料の調査、収集
２）関係者への取材
３）作品・資料分析

本研究では各年度、人形劇の図書館、ＮＨＫ放送博物館、早稲田大学演劇博物館等において資料調査を行い、それらの検証を通じて得た情報を基に関係者への取材を実施した。こうした作業をもとに、日本の新興人形劇の全貌とその波及について具体的な作品・資料分析を行った。

本研究の方法について、以下に年度を区切って述べる。

≪平成 29－30 年度≫

平成 29 年度は 4 月から 7 月にかけて資料の調査依頼や状態確認を行ったのち、8 月以降に継続して国内の関連機関に出向き、関連する資料の選定と収集を実施した。来日公演のインパクトが芥川龍之介や萩原朔太郎らによって報告されている人形劇団ダアク座の活動に関する資料や、戦前から戦中、戦後にかけての、日本の主だった人形劇団に関する資料等の収集を主に進めた。なおこれらの中には資料の特性上、紙片が束ねられているだけのものや他の資料に混ざって保管されているもの、誰がどのような目的で書いたのかが判然としないものも含まれているため、整理が困難な資料も少なくないが、可能な限り網羅的に収集することを目指した。また、こうした作業を進めていく中で、追加調査する必要のある資料が複数明らかになったため、研究期間中

は調査収集を継続して実施した。

≪平成30－令和元年度≫

平成30年度、令和元年度も引き続き調査を実施しつつ、関係者やその家族への取材と作品分析・資料分析を開始した。関係者の中には既に亡くなっている方も少なくないが、その場合はご家族らに連絡を取り、聞き取り調査や資料提供のご協力をいただいた。そうして得られた資料や情報を基に、戦前から戦中戦後にかけての人形劇団の代表格である人形座、人形劇団プーク（またはその前身のダナ人形座）、人形劇団ひとみ座関連の作品や資料を中心に取り上げ、その特色と実験性について検討した。

また、当時人形劇にかかわる人々の活動が舞台上演にとどまっていなかったことも鑑みて、彼らの技術や理念が舞台を離れテレビや映画といった別メディアにいかに波及していったかについても調査した。そうすることで人形劇が単なる舞台表現の手段にとどまらず、他メディアにおいていかに重要な役割を果たす存在であったかも検討することができた。

４．研究成果

本研究の主な成果について、年度ごとに述べる。

《平成29年度》

平成29年度は、早稲田大学演劇博物館、人形劇の図書館、ＮＨＫ放送博物館のアーカイブス等での調査を実施し、特にテレビ人形劇に関する資料を多く収集した。本年度に主な調査対象とした作品は『テレビ天助漫遊記』、『チロリン村とクルミの木』、『ひょっこりひょうたん島』などで、その成果の一部は日本人形玩具学会での研究発表や、学会誌『人形玩具研究』への論文掲載という形で発信した。

これらの初期テレビ人形劇に共通するのは、いずれも「テレビとはいかなるメディアであるか／あるべきか」という一種のテレビ論となり得ている点である。こうした性質は、舞台を出自とする人形劇人たちはもちろん、ラジオや映画など様々な背景を持つ者たちが、テレビというメディアの最初期に携わったことで生まれたものに他ならない。今日、テレビ人形劇はかつてほど盛んであるとはいえないが、少なくとも初期テレビをとらえる上では看過できぬ存在であることが明らかになった。

《平成30年度》

平成30年度は、昨年度に引き続き資料所蔵機関での調査を実施しつつ、人形劇関係者への取材を並行して行った。本研究が対象とする作品の多くは台本や映像といった一次資料が残存しておらず、あったとしても散逸している状況であるため調査も容易ではない。そこで関係者や関係者の家族にコンタクトを取り、証言や資料を集める作業を進めたことで、これまで分かっていなかった当時の状況等を知ることができた。

9月には、29年度から30年度にかけて本研究によって得られた成果の一部を踏まえ、報告者による単著『人形メディア学講義』（河出書房新社）を刊行した。拙著に関して、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、ウェブ等で取り上げられる機会にも恵まれ、人形文化研究の可能性や、本研究の重要性を社会に向けて広く発信することができた。

なお資料所蔵機関での調査及び関係者への取材を行ったことで、新たに多くの関連作品、関連劇団、関連資料の存在が明らかになってきたため、次年度も引き続き調査作業を継続することとした。

《令和元年度》

令和元年度は、平成30年度に引き続き資料所蔵機関での調査と関係者への取材を行い、主に初期テレビ、特撮映画、テレビアニメーションと人形劇の関連について検討した。

本年度はそうして得られた成果の一部を踏まえ、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館にて『人形劇、やばい！』と題した展示に企画協力を行った。本展示では、戦前、戦中、戦後、現代とセクションを分け、人形劇やそれを取り巻く文化がもつ、前衛的・社会風刺的な側面を取り上げた。戦前は前衛芸術家たちに重宝された人形劇が、戦中は大政翼賛会に利用され、戦後はテレビに進出して広く大衆に支持されるようになるプロセスを追うことで、単に「子ども向け」のものとしてはとらえられない多層的な存在であることを改めて示すことができた。この展示をきっかけに、イベントや講演会への登壇の機会にも恵まれ、本研究の重要性を社会に向けて広く発信することが可能になった。

また、六本木ヒルズが主催する国際シンポジウム「Innovative City Forum」に登壇したことで、様々な分野の研究者や国内外のアーティストと意見を交換する機会も得られた。人形や人形劇がいかなる可能性をもつメディアであるかについて、人形文化研究者としての立場から発信し、そこでの議論を基に、NTT 出版より『人は明日どう生きるのか ――未来像の更新』と題した書籍を刊行できたことも重要な成果である。

上述してきた一連の研究活動について、人形文化研究の発展に多大なる貢献を果たしたと認

められ、一般社団法人日本人形玩具学会より学会賞を授与された。今日、人形文化に関する学術研究は活発であるとは言い難いものの、本研究の実施によって今後発展していく可能性を一定程度は示せたと考えている。

なお、研究期間を通じて資料調査において所蔵機関の方針が変更されたり、資料状態の急激な悪化などを理由に収集自体が困難になることもあった。加えて、関係者への取材が予定通りに進まないこともあり、事前に想定していた計画のすべてを実行することはかなわなかった。更に新型コロナウィルスの流行により、令和元年度末に予定していた調査や取材、成果発信の機会が複数失われたことは誠に遺憾である。しかしながら、本研究において取り扱われる資料や情報は、いずれも先行研究でほとんど言及されたことのないものが多く、内容やその存在を詳らかにすること自体に学術的な意義がある。人形文化研究自体がいまだ発展途上の分野であることや、扱っている資料の希少性を考慮に入れれば、本研究計画の意義を損なわない十分な成果を得られたと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 菊地浩平	４．巻 28
２．論文標題 テレビ人形劇は滅びゆく？　―『テレビ天助漫遊記』から『ねほりんぱほりん』へ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 人形玩具研究	６．最初と最後の頁 66-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 菊地浩平
２．発表標題 「戦後人形劇のテレビ進出とその意義 『テレビ天助』から．『ねほりんぱほりん』まで」
３．学会等名 日本人形玩具学会第29回研究発表会
４．発表年 2017年

１．発表者名 菊地浩平
２．発表標題 人形劇としての、この世界
３．学会等名 東京外国語大学大学院国際日本学研究院主催「媒体としてのヒトガタ：現代日本における人形の生産・消費・処分」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 菊地浩平
２．発表標題 「人形と話す～えんじる人形～」
３．学会等名 聖徳大学言語文化研究所主催シンポジウム「人形と話す～みる人形 あそぶ人形 えんじる人形～」（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 菊地 浩平	４．発行年 2018年
２．出版社 河出書房新社	５．総ページ数 334
３．書名 人形メディア学講義	

１．著者名 ボナヴェントゥーラ・ルペルティほか	４．発行年 2019年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 307
３．書名 日本の舞台芸術における身体―死と生、人形と人工体	

１．著者名 南條史生ほか	４．発行年 2020年
２．出版社 ＮＴＴ出版	５．総ページ数 264
３．書名 人は明日どう生きるのか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考